



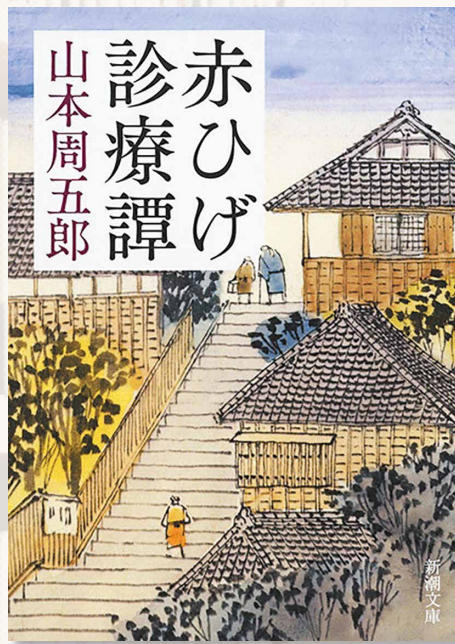
おすすめの一冊

山本周五郎『赤ひげ診療譚』

医療の本質を教えてくれる小説です。1959年に刊行され、映画やテレビドラマ化されたことがあるため、ご存じの方も多いでしょう。

舞台は小石川養生所、江戸幕府によって享保7（1722）年に設置され、幕末まで実際に運営されていた貧民のための無料医療施設です。物語の主人公は、通称「赤ひげ」こと新出去定（責任医師）と医員見習として養生所に住み込みとなった保本登です。保本は長崎遊学後のエリート青年医師、江戸へ帰れば幕府の御目見医を約束されていたにもかかわらず、強制的に養生所に配属されたことが全く不服で、当初は激しく赤ひげに反発していました。赤ひげは底辺社会にいる人々に対して分け隔てなく診療を施す医師です。

物語はオムニバス形式で進行し、多くの患者さんたちとの出会いを通じて人間のさまざまな側面を描いていく中で、保本は赤ひげより多くを学び、医



赤ひげ診療譚
山本周五郎 著
新潮文庫

師としてだけでなく人間としても大きく成長する過程を描いています。最終的には御目見医に上がるために養生所を出る、という赤ひげの命令に逆らって養生所にとどまることを決意します。

ある一話に六助という大機里爾のがんで臨終の状態にある患者が登場します。大機里爾とは杉田玄白が『解體新書』（1774年）で臍に当てた臓器名、臍

は宇田川玄真が『医範提綱』（1805年）で提唱した臓器名です。大機里爾のほうが格好よくないですか？

話中、赤ひげは「医術がなさけないものだ」ということを感ずるばかりだ、病気が起こると、ある個体はそれを克服し、別の個体は負けて倒れる、医者はその症状と経過を認めることができず、生命力の強い個体には多少の助力をすることもできる、だが、それだ

けのことだ」と言っています。また別の話の中で「仁術どころか、医学はまだ風邪ひとつ満足に治せはしない、病因の正しい判断もつかず、ただ患者の生命力に頼って、もそもそ手さぐりをしているだけのことだ」とも述べています。江戸時代と現代では社会構造や医療環境が大きく異なるものの、根本は現在に通じるところがあると考えます。医学は現代でも決して完成された科学ではないことを肝に銘じて日々の診療に臨む必要があるでしょう。

小説は文庫本で400ページ弱、時間がない方は黒澤明監督の映画「赤ひげ」（1965年）だけでも必見です。なにしろ山本周五郎が「原作より素晴らしい」と褒めたと言われています。養生所があったのは現在の小石川植物園内、養生所の井戸は現在も保存されています。行ってみたいと思いませんか？訪れてみてください。

水口 安則

みずぐち やすのり

香川県出身。1981年徳島大学医学部卒業。1985年より国立がん研究センター中央病院、2022年定年退職後、東京都予防医学協会、国立病院機構 東京医療センターなどで勤務中。超音波専門医・指導医（腹部超音波）。